
絵羽模様

ラッキーライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絵羽模様

【Nコード】

N4365W

【作者名】

ラッキーライン

【あらすじ】

名探偵コナン、まじっく快斗の二次創作の短編集です。いろいろな話があります。カップリングは快青、新蘭、平和、コナン×キッドなどです。不定期最新なので最新は遅いです。感想、リクエストお待ちしております。

キッドのいたずら（前書き）

コナン×キッド。キッドが蘭に変装します。

キッドのいたずら

キッドキラー、江戸川コナンは今回キッドからの予告が届いた美術館に来ていた。蘭やおっちゃんには、少年探偵団のみんなと遊んでくると言って出てきたが多分、バレないだろう。歩美ちゃんと光彦と元太はそれぞれ家族で旅行に行っているし、灰原には口止めをお願いしてきた。これでバレるわけがないだろう。

「必ず、キッドからこの『緑の木漏れ日』を守るんだ！わかったか！」

中森警部は相変わらずキッドを捕まえようと燃えている。今回、キッドが盗もうとしているのは世界最大のエメラルド『緑の木漏れ日』である。美術館の中は館長の希望により解放されているのでそこらじゅうにキッドファンがいて、キッドが比較的忍び込みやすいので中森警部は何人が刑事を客に紛れ込ませているらしい。

（キッドの予告まであと1分……今回こそ捕まえてやるぜ。）

コナンは気合いを入れ直すと、時計に目をやった。

10秒 9秒 8秒 7秒 6秒 5秒 4 3 2 1 0

ガタンッ

いきなり照明が消え、まっくらになる。これは、予想済みだったのであらかじめ持ってきていた懐中電灯をつけ『緑の木漏れ日』の方へ向ける。すると……

「キッド……！」

キッドがまさに去るところだった。

「まてっ！」

コナンは、キッドの後を追って走る。

「美術館の出入り口を封鎖しろ！」

中森警部が部下達に命令する。これで、キッドは外へ出られないだろう。しかし……。窓から逃げるキッドのダミーを見た中森警部は……

「キッドを追うぞ！」

と一瞬で閉鎖を解き外へ消えていった。

（おいおい……。なんであんなダミーに騙されるんだ中森警部は……）

コナンは、心の中で中森警部に毒づきながらキッドを追っていた。だか……。キッドが放った催涙スプレーに気を取られキッドを見失ってしまった。「くそつ。後、少しだったんだけどなあ。」

コナンが悔しがっていると、背後からいつも聞いている幼なじみの少女の声が聞こえて来たのだ。

「コナン君！ダメじゃない嘘ついちゃ。哀ちゃんから聞いたわよ。」

「らっ蘭姉ちゃん……。」

（灰原の野郎……言いやがったな……）

「ほら、かえるよ！」

「あ、待つて蘭姉ちゃん……。」

コナンは、いきなり現れた蘭に腕を引っ張られ美術館を後にした。

「コナン君。勝手にこんな遅くまで、出歩いちゃだめよ。」

「ゴメンなさい。」

蘭に怒られ、コナンは正直に謝るが……。

「ぶははははははっ！」

突然、蘭が笑い出したのだ。その笑い方は蘭ではなく……まさしく、キッドの笑い方だった。

「おめー、キッドだろ？」

コナンは脅すような低い声で言った。

「バレた？」

「つたりめーだ。そんな笑い方するのはおめーくらいだからな。」

「ふっ。さすがだな。じゃあな、名探偵さん。」

それだけ言い残すと蘭に変装したキッドは煙をたててきた……。

おまけだが、このあとコナンは本物の蘭にこっぴどく叱られたのだ。
った。

キッドのいたずら（後書き）

どうも、ラッキーラインです。初めての二次創作です。なんだか、一人称だかなんだか分からなくなってしまうました…。次からは、しっかりできるように心掛けます。次回をお楽しみに！

星空の下で…（前書き）

WISHO2さんのリクエスト。新蘭で、恋人になる話です。

星空の下で…

「着いたぞ、蘭。」

組織撲滅から一ヶ月。新一は、真実をすべて蘭に打ち明けた。江戸川コナンのこと、眠りの小五郎のこと……。蘭も、最初は驚いている様子だったがちゃんと理解してくれた。だが、新一には一つだけ気掛かりなことがあった。それは……。蘭がいつまでたっても告白の返事をしてくれないことだった。新一も聞こうとはするのだがなかなか聞くことができなかったのだ。そんなある日、急に蘭が「二人っきりで星を見たい。」と言ったので近くの小さい山に見に行くことになったのだ。

「わー！綺麗！やつぱり町の中だとここまでは綺麗に見えないもんね。」

「ああ。でも、はしやぎすぎて墜ちないようにしろよ。」

「なによ！私はそんなドジじゃありません！」

「バーロー。俺は蘭のことを心配して言っただんだよ！だから、そういう意味じゃねえよ。」

「なんだ……。ありがとう新一。」

ニツコリと笑う蘭。思わず新一は顔が赤くなった。そのとき、流れ星が二人の頭上を通り過ぎた。

「あつ！流れ星！お願いしたかったなあ。」

「まあ、また流れるだろうよ。ところで蘭。何をお願いしたかったんだ？」

「それは、その……………」

「まあ、どうせくだらねえことでも願おうとしてたんだろ？」

「違います！」

「じゃあ言ってみろよ。」

「え、そっそれは……………」

「言えないんならどうせくだらねえことなんだろ？」

「ああもつつ！くだらないことじゃありません！私は『新一といつまでも一緒にいられますように』ってお願いしたかったの！」

「……………あのさ、蘭。」

「なに？！全部言っただじゃない！」

「今の願いごと、告白の返事って受け取ってもいいか？」

「え……………。うん、いいよ。」

「蘭、俺もういなくなったりしねえから。ずっと蘭のそばにいてやる。」

「新一……………。」

こうして、新一と蘭はきらめく星たちに祝福されながらめでたく恋人になったのだった……………。

星空の下で…（後書き）

どうも、ラッキーラインです。今回はWISHO2さんのリクエストでした。自分の文章力を上げたいと今回は改めて思いました。WISHO2さんリクエストありがとうございます。満足していただけたら恐縮です。

好き?.....NO愛してる(前書き)

WISHO2様のリクエストで新蘭です。『星空の下で.....』の続きです。

好き？……NO愛してる

ガラッ

「おっはようーっ！」

「おはよー。」

新一と蘭は今日も一緒に登校してきた。……手を繋いで。

「おはよう、蘭！あんた達熱いわね〜！朝から手を繋いじゃって！昨日、めでたく恋人になったらいいじゃない！」

「そっ園子。なんでしってるの？！」

「たまたま、私、町外れにある小さい山にあるキャンプ場にいったわけ！そうしたら、蘭と新一君がいていいふいんきだったのよ！」

「まっマジかよ……。」

「まあ、いいじゃない。お二人は全校公認の夫婦なんだし！」

園子の声に続いてクラスの全員が「らーぶらぶ！らーぶらぶ！」と叫びはじめた。

「新一、どうしよう。なんかすごいことになっちゃったね。」

「ああ。」

蘭と新一が小声で話していたとき、

「こらー！席に着きなさい！」

運よく先生が現れたため朝はこれだけでおさまった。

それから、休み時間になるたびかわれ続け、やっとかえることができた。

「新一。ちよつといい？」

「なんだよ。蘭。」

蘭は帰り道。新一に気にしていたことを問い掛けた。

「ねえ。新一は私のこと好き？」

「なんだよ今更。」

「いや、改めて聞きたいなって思っ……。」

「そうだな……。すぎじゃないな……。」

「えっ？」

「愛してる、だな。」

「新一……。」

新一は、蘭を優しく抱きしめた。

「私もだよ。新一。」

見つめ合う二人……。とてもいいんきだった……。が……。

「ひゅーひゅー！いいねえお二人さん！」

結局、クラスメイトに邪魔されるのだった。

好き?.....NO愛してる(後書き)

どうも、ラッキーラインです。今回もWISH02様のリクエストでした。どうも、リクエストをしてくださってありがとうございます！私も新蘭が好きなのでかなりノリノリで書かせていただきます。また、リクエスト等ありましたらよろしくお願いします。

和葉は一番、事件は二番

「平次……！帰ろ……！」

「おう。」

平次と和葉は恋人どうしである。平次が和葉の気持ちに気付くのがおそかったのでなかなか恋人になれなかったが平次が和葉の気持ちに気付く恋人にいたったのだ。

「平次、そういえば今週の日曜日空いてるん？」

「んー。すまん和葉！その日はあいにく事件解決を手伝いせなあかんのや。」

「そうなん？じゃあ、土曜日は？」

「そこは………すまん！そこもあいにくうまっとるわ。」

「ふーん。土曜日も事件なん？」

「ああ。そうや。」

「なんや！平次は！いつもいつも事件事件って……。私と事件どっちが大事なん！？」

「それは………。」

「なんや。答えられへんの？もういい！一人で帰る！」

「ちよつ和葉！」

和葉は平次の言葉を無視し、先に走って行ってしまった。

「なんや、和葉。急におこり出して………。」

平次は一人とぼとぼと帰り道を歩いていた。

「やっぱり、即答したほうがええか……。よっしゃー！そうと決まればさっそく決行やー！」

平次は、走り出し和葉の家へ向かった。

「なんや。平次。私が一番じゃないんか？」

和葉は一人自分の部屋にいた。

「事件事件事件って……。そんなに大事なら、事件と付き合っ
てしまえばよかったんや。」

ベットに転がりそう呟く。はあ、とため息をついたとき！

「和葉！」

ドアがバーンと勢いよくひらいた。

「平次、なんできたん？」

「和葉！俺、お前が一番大事や！だからその、あんまりへこむな！」

「平次……。私も平次が一番や！」

こうして、二人は改めて互いの気持ちを確かめあった……。

和葉は一番、事件は二番（後書き）

どうも、ラッキーラインです。今回は、オリジナルでした。やはり、大阪の二人は書くのが難しいです。次回をお楽しみに！

いつまでも……………

「新一、遅いなあ。」

蘭は、トロピカルランドの前で新一が来るのを待っていた。

今日は、新一と蘭が恋人になってから初めてのデートである。

「蘭！わりい。遅れた！」

新一が走りながら蘭のもとへ来た。

「大丈夫！さあ、はやくいこ？」

「おう！」

こうして蘭と新一の楽しいデートが始まった。

今回は、何事もなくたのしい時間が過ぎ、たくさんの乗り物に乗りたりと楽しい時間を過ごした。

「なあ、蘭。」

「なに？新一？」

「あそこいかねえか？」

「あそこって……………あ！あの、噴水？！」

「早くいこうぜ！」

「うんっ！」

蘭と新一は、急いで噴水のところへ向かった。

「ふう。間に合ったな。」

「よかった。間に合って。」

8時1分前。新一と蘭は噴水の真ん中に立ち8時になるのをまつ。

「5 4 3 2 1!」

新一と蘭と一緒にカウントダウンし、噴水が出る。周りの空間をシヤットアウトし、自分達だけの空間が生まれる。

「新一、そういえば私が記憶喪失になったときにここに来て思い出したんだよね?」

「ああ。そういえばそうだったな。あの時は、ヤバかったぜ。俺もコナンだったし。」

「新一、もういなくならないよね?」

蘭が新一に確かめるように言う。

「ああ。いつまでもお前の隣にいてやる。だから安心しろよ。」

「うん……………」

二人は噴水の長さを気にせずしばらくの間抱き合っていた……………。

……………いつまでも、一緒だぜ……………

forever equable love

夜6時。蘭は、展望レストランで新一の到着を待っていた。

新一が昨日、トロピカルランドからの帰り道に、

「なあ、蘭。明日夜6時に展望レストランに来られるか？」

と聞いて来たので蘭はもちろん「行く」と返事をし、今日来たわけだが………………。いつものごとく遅刻。夜6時をまわっても

新一は現れない。

「新一に何かあったのかなあ。」

蘭が不安な気分で待っていると、やっと新一がやって来た。

「わりい。また遅れた。ごめんな。俺が誘ったのに……………」

「ううん。いいよ。新一に何事もなくてよかったよ。」

蘭は、そういつてニッコリ笑って見せた。その笑顔はまるで天使のような微笑みで、思わず新一は顔をあかくする。

「ほら、早く座ろ！」

「おっおう!!」

二人は、あらかじめ新一が予約していた席に座るといろいろな話（新一のする話は八割はホームズだが）をしたりして食事を楽しんだ。

夜8時半。新一と蘭はいまだ展望レストランにいた。

「ねえ、新一。」

「ん。なんだ？」

「あのさ、新一はまだ、プップロ……………やっぱなんでもない。」

「なんだよいったい。まあ、いいけどよ。」

新一は、そっけない返事を返す。いつもならすぐつかかってくる

新一がそっけない返事をしたので蘭は不思議に思っていた。

しばらく、沈黙がつづく。新一は、内心とてもあせっていた。「いつ、プロポーズすればいいのか」タイミングが掴めずあせっていたのだ。

(うつ……………。ヤベーな。そろそろ話をきりださないと……………。)

新一は、心を決め蘭をまっすぐ見つめた。

「なあ、蘭。」

「なに？」

「うまいこといえねえけど……………。俺には蘭しかいない！だから、その…………俺と結婚して下さい！！！」

驚く蘭。しかしすぐに口を開いた。

「はい！喜んで！！！」

蘭は新一をまっすぐ見つめて言う。

「そうだ、指輪。」

新一は、ポケットから指輪を取り出すと蘭の左手の薬指にそっとはめた。

「永遠に愛しつづけるよ…蘭。」

「私も、永遠に愛しつづけるよ…新一。」

二人はしばらく見つめ合い、そして……………

……………
二人の温もりを確かめるように静かに口づけをした……………

噂の名物夫婦！！（前書き）

WISHO2様のリクエスト。蘭が新一のプロポーズを受けた翌日です。前の新蘭の続きです。

噂の名物夫婦！！

「おはよー！お二人さん！！」

朝、一番。教室に新一と蘭が入って行くと園子がにやにや笑いながら話しかけてきた。

「おはよう、園子。どうしたの？そんな顔して。」

蘭が不思議そうに園子に聞く。

「なんでもない！なんでもない！」

園子は、またにやにやしながら受け流した。

「なんでもないならいいけど……………」

蘭も、それに納得して受け流す。

しかし、新一は考えていた。

（何か怪しい…………。園子の奴なにかたくらんでるな。）

新一は、難しい顔をしながらしばらく考えこんだ。

放課後。新一は、蘭の部活が終わるのを待っていた。いつもは、教室で待っているのだが園子に、

『たまには、蘭の部室の近くで待ってあげな！』

と言われこうしてまっているのである。

一方、教室ではクラスメイト総出で飾りをつけていた。

「ふふふっ！さあ、あの夫婦のためにがんばらなくちゃね！」
不適な笑みを浮かべながら……………。

「新一！なんでここに？」

しばらくして蘭が現れた。

「いや、別に。」

「ふーん。でも、ありがとうねいつも待っていてくれて！」

「バツバロ！それはこっちの台詞だってーの！俺がコナンの時、ずっと待っていてくれてありがとうな！」

「なによ、いまさら。いいの。私、待ってるの嫌いじゃないし。」

「そっそうか。ならいいんだけどよ……………ってあー！！！」

「どうしたの、新一！」

「今、依頼されてる事件の資料、教室に置きっぱなしだ！ヤベー、蘭ちよっと待っていてくれ！」

「えっ！待ってよ新一！」

二人は、クラスメイトが待つ教室へ全速力で行った。

新一と蘭は、急いで階段を駆け上がり教室の扉を開いた。すると…

……………！

パーン！

勢い良く、クラッカーが飛び出し二人の前を横切る。二人が黒板に目をやると……………！

【工藤新一＆毛利蘭、婚約おめでとう！！！】

「え？……………」

新一と蘭は、黒板の字を見てあぜんとする。そこへ園子がやって来て驚くべきことを二人に告げた！！

「いやーたまたま展望レストランに食事に来たら蘭と新一君がいてなんと新一君がプロポーズしたじゃない！！驚いたわよー！」

「みられてたの！！（かよー！！）」

「まあまあお二人さん落ち着いて！だから、今日は、盛大に二人を祝福しまーす！！」

園子の一言でどんちゃん騒ぎは幕を開け、新一と蘭はまたまた園子のせいでクラスメイトにからかわれるはめになるのであった……………。

もう、待たせない（前書き）

新一のプロポーズから一ヶ月後の話。新一と蘭がお互いの両親に結婚の挨拶にいきます。

もう、待たせない

新一のプロポーズから一ヶ月。新一は、とても緊張していた。それは……………半月前に遡る。

「ねえ、新一。そろそろ私のお父さんとお母さんにあいさつに行かない？」

「あいさつねえ。確かに。」

「じゃあ、半月後くらいでどう？」

「ん〜。別にいいけどよお。おっちゃん簡単に聞いてくれっかな？」

「どうだろう？お父さんの性格から言うとたぶん……………」

「粘るだろうな。」

「だよね……………」

「でも、いつかきちんと言わいとやばいからな。先にいつちまったほうが楽し……………。半月後、いくよ。」

「本当！じゃあ、お父さんとお母さんに言っておくね。」

「ああ、たのむ。」

そして、半月後……………

「なんか、緊張するね。」

「ああ。きつ緊張するな……………ははは。」

「新一？」

いつも、華麗に事件を解決している新一とは思えないくらいの緊張っぷりであった。

「大丈夫？なんか、おかしいよ、今日の新一。」

蘭がいつもとちがう新一に不安になり聞く。

「……………おっちゃんに話すと思うとなあ。俺嫌われてるみたいだよ。」

「まあ、確かにお父さんがどう答えるか心配だけどきつと新一なら大丈夫だよ！！」

「蘭、ありがとう。」

新一は、蘭に励まされ毛利探偵事務所へ足を踏み入れた。

「蘭。それで、はなしがあるっていうのはなんなの？」

蘭の母、妃がやさしくきいてくる。

「実は、あのね、私たち……………結婚しようとおもった。」

「なるほどねえ。私はいいと思うわよ。ただし結婚するのは大学に入って成人したらね。」

「あつありがとうございますー！！」

「お父さんは？」

「……………探偵坊主！蘭をもう二度と待たすなよ！二度と待たさないなら結婚を許してやる。」

「本当ですか！ありがとうございます！」

1番困難だと思っていた小五郎が許しをくれたので、新一は蘭に思わずVサインをした。

「蘭！探偵坊主がきにくわなかったらすぐもどってこいよ！」
「お父さん……………」

小五郎の褒は涙で濡れていた。

「よかった。いまくいつて。」

蘭はそのあと新一の家に遊びにきていた。

「ああ。おっちゃんも探偵である前に蘭の父親だからな。」

「うん、そうだね。」

「あのさ、蘭。改めて、言うよ。」

「へ？なにを？」

「俺を選んでくれてありがとう。一生幸せにするからよ！」

「ありがとう！新一！」

二人は静かに唇を重ねた。短いものだが改めてお互いの大切さにきづく……………そんなキスだった。

後日。今度は新一の両親に挨拶にいったのだが……………。

「蘭ちゃんがお嫁さんだなんて新ちゃんにはもったいないくらいだわ！」

「新一！しあわせにな！」

と二人とも笑顔で祝福してくれた……………。

今日から新たな生活（前書き）

『もう、待たせない』の続き。新一と蘭の結婚式です。

今日から新たな生活

「式まであと30分か……………」。

今日は、新一と蘭の結婚式である。今、二人は二十歳。大学生だ。蘭の母、妃に言われたとおりきちんと成人してからの式であった。コンコン

ドアをノックする音が聞こえる。

「はい。だれですか…………… って服部!?」

ドアを開けると目の前に西の高校生探偵服部平次が立っていた。

「よお、工藤! 結婚おめでとうな!」

「俺はてつきり、園子が冷やかしにきたかと思っただぜ。」

「私もいるわよ、新一君!」

平次の後ろからひよつこり、園子が現れた。

「園子っ。いたのかよ……………。そういえば、服部。おまえの彼女は?」

「和葉か? 和葉ならねえちゃんのどこいってとるで。」

「蘭、綺麗だったわよ〜。」

園子の何気ない一言に大きく反応する新一。

「ほんとか!?」

「もう本当女神様みたいに綺麗だったわよ〜。だけど、旦那はまだみちゃだめよ! 式が始まるまでのお楽しみなんだから!」

「……………」。

あからさまにいじけた顔をする新一。

「やっぱりいとしの彼女のことになると形無しね。」

「はっ灰原!」

今度は、園子の後ろから灰原哀が現れた。

「さて。そろそろ式場に戻るとしますか。」

「工藤〜! また、式場でな〜!」
バタンッ

こうして三人は式場へ帰って行つた。

リンゴーン……

小五郎が蘭の手を引いて新一の元へ歩いて行く。「探偵坊主。蘭を頼むぞ。」

小五郎はそう一言呟くと新一に蘭を引き渡す。

「その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

牧師が誓いの言葉を述べる。

「はい、誓います。」

すっかりとした決意が表れた声で返事をする。小五郎は、娘の姿を見て号泣している。妃も、今日は仲良く小五郎と肩をならべて泣いていた。

「では、誓いのキスを……………」

二人は、静かに口づけをする。チャペルという、神聖な場所にあう、美しいシーンであった。周りも思わず見とれてしまうほどであった。

いよいよ、ブーケトス。花は赤い薔薇。新一がえらんだのだが新しいと蘭も納得してしまうほどであったが。

「それっ！」

蘭が後ろへ投げる。だんだんと落下していき、とつたのは……………

「えっ……………」

和葉と園子であった。二人同時につかんだため仕方なく半分に分けることとなった。

「蘭ちゃん！幸せになつてな！」

「ありがとう、和葉ちゃん！」

「蘭……！幸せにね……！」

「ありがとう、園子！」

ブーケを取った二人は蘭に駆け寄り抱き合う。

「お幸せにね、お二人さん。」

「工藤……！ねえちゃんの尻に敷かれないうにな……！」

新一のほうも新一のほうで大変盛り上がっていた。

しばらくして人がおさまると蘭は新一の元へ駆け寄った。

「蘭！……………そのウエディングドレス、すげー似合ってる。」

「ありがとう、新一！新一もタキシードすごい似合ってるよ！」

「これからも、お互い力を合わせてがんばろうな。」

「うん！がんばっていいこうね！」

見つめ合う二人。ほんのり顔が紅くなる。

……これから、新たな生活、がんばろうね……

快青プロポーズ（前書き）

快斗と青子のプロポーズ話。快斗と青子は付き合っている設定です。

快青プロポーズ

【名探偵工藤新一、結婚!!】

ある日の新聞記事。一面にでかでかと書かれた工藤新一の結婚報道。

「なに~~~~~~~~!!!!!!」

元怪盗キッドこと黒羽快斗（大学生）は自宅に彼女が来ているにもかかわらず大声をあげた。

「何？大声だしちゃって~~~~。どーせバ快斗のことだから隣に並んで笑ってる女の子に見とれてたんでしょ~~~~。」

「バーロー。そんなんじゃないよ。……………それよりよ・せつかくの休日だしトロピカルランドにでもいかねえか？」

快斗のこの一言に青子はパアアと顔を輝かせ、

「行くっ！」

と元気に返事をしたのだった。

さて、快斗はいつたいなにをたくらんでいるのだろうか……………

……………。

トロピカルランドでは、ゴーカートにのったり食事を楽しんだり（

またもや青子が魚を食べていたので快斗は青ざめたが）

楽しい時間がながれていた。

「楽しかったね！」

「ああ。たのしかったな。」

快斗は、なんだか上の空。しかし、その理由はすぐわかるのだった。

「青子。」

トロピカルランドのお城の中。快斗は青子に真剣な眼差しを向ける。思わず青子も真剣な顔になる。

「実は、ずっと隠してきたことがあるんだ。」

「ずっと、隠してたことって？」

「……………実は俺、怪盗キッドだったんだ。」

今まで、隠してきたことを言う。

「わかってたよ。何年いっしょだと思ってるの？快斗のことだから、理由があるんでしょ。」

「……………ああ。俺が怪盗キッドをやってたのは……………親父を殺したやつらを見つけるためだ。今は、その殺したやつらは牢屋にいるけどな。」

「ふうん。でも、もうやらないんでしょ。」

「ああ。目的はすんだからな。……………ごめんな。ずっと隠してて。」

「ううん。いいの。気にしないで。青子は、快斗のことしんじてるもん。」

「青子……………」

「快斗……………」

「それでよお。いきなりなんだけど……………」
「なに？」

快斗は、自分の手を指差し、

「ワン、ツー、スリー！」

カウントをして手を開く。なんとそこには……………きらめくダイヤの指輪があった。

「俺と、結婚して下さい！」

「はいっ！」

とても、いいムードだった。しかし……………。

「やべっ。青子、閉園時間だ！走るぞ！」

「あつ！ほんとだ！いそがなきゃ！」

やはり、すぐにぶち壊れいつもの二人に戻るのであつた……………。

歩美の王子様！（前書き）

コナン×歩美＋少年探偵団（？）です。

歩美の王子様！

「コナンくん！おはよう！」

朝一番。歩美は、いとしの王子様に挨拶をする。

「おはよう、歩美ちゃん。」

ニツコリと笑いかけるコナン。歩美の胸は、ますます高鳴る。歩美の楽しみは、朝一番にコナンに挨拶すること。コナンの笑顔は歩美の元気の源であった。

「今日は、将来の夢について作文を書いてもらいます。」

「はい！」

みんなで元気よくお返事。思い思いの将来の夢のことを書くのであった。

「俺は、うな重を腹一杯食うことだ！」

「僕は……………」

光彦が哀のほうを見つめる。

「みんないいわね。夢があつて。」

哀が何気なく呟く。

「コナン君は、なに？」

「俺は、やっぱり親父をこえることだな。」

「ふーん。」

「歩美ちゃんはなんなんですか？将来の夢。」

「作文ができるまで秘密だよ！」

歩美は、笑顔でこたえる。

「作文ができたら廊下にいる先生の所へ持ってきてね。」
「はい！」

歩美達は、元気よくお返事するともくもくと作文を書き進めた。

「……できたー！」

いつせいに言う。三人は、やっと出来上がった作文を先生の所に持
つていき廊下に飾ってもらった。

問題の歩美の将来の夢は……

……。

【コナン君の奥さんになること！】
だった……。

これを見たコナンは、

「……………」

なにも言えなかったそうだ……………。

新婚夫婦のある日の日常（前書き）

新蘭で新婚生活の日常です。

新婚夫婦のある日の日常

ボタンッ！

「新一っ！いつまで寝てる気？せつかくの休日なんだからさっさと起きなさいっ！」

ある日の休日。工藤家には新妻、工藤蘭の怒号が響いていた。

「ったく……。昨日は……」「推理小説を読みふけてたから眠いでしょ！」ああ、そうだよ。」

「全く……。ほんつと推理オタクなんだからっ！さっさと起きて朝ご飯食べちゃって！」

「朝飯はいらねーから寝かせてくれ。」

新一のこの一言に蘭は怖い笑みをうかべながら

「朝ご飯。食べるわよね？」

有無を言わせないような声で言う。

「ハイ……………」

新一は、のそのそと起き朝ご飯を食べはじめのだった……………。

新一は朝ご飯を食べ終わるとまたすぐ推理小説を読みはじめた。蘭は、なにもすることがなくただボケーとしていた。

（まったく……………新一ったら事件でいなか推理小説を読んでるかなんだから……………。ちよつと焦らせてみようかな。）

そう、思い立った蘭は早速新一をからかうことにした。

「ねえ、新一。」

「ん？なんだ？」

「もし、私がこの世からいなくなるのと、推理小説が全部なくなるのだったらどっちがいやだ？」

蘭は、難問を出す。推理小説好きの新一は多分どちらともすてがたいはずだと思っただのである。しかし、新一は蘭の予想とはまったく違う言葉を発した。

「まあ、両方とも嫌だけどー……………やっぱり蘭がいなくなることのほうがいやだな。」

「えっ……………」

予想外の言葉に少し蘭は戸惑う。

「どうして？」

「そりゃ、蘭は俺の一番大切な人だからだな。蘭がいなくなると思うと絶望的だぜ。」

「そっか……………。私の一番大切な人は新一だからね！だから新一

……………いなくならないでね！」

「ああ！ぜってー蘭を置いていなくなったりしねーよ！だから、安心しろよ！」

「うん！新一、大好きだよ！」

「俺も、蘭が大好きだからな！」

そして……………二人は静かに口づけをかわしたのだった……………

……………。

後日談だが、その後蘭はしばらく機嫌がとてもよく、昼食も夕食も新一の好物が並びいつもに増して豪華だったとか……………

.....
o

新一、浮気疑惑！？（前書き）

『新婚夫婦のある日の日常』 つづきで新蘭です。遅くなり、すいませんでした。

新一、浮気疑惑！？

トゥルルルル ガチャ

「はい、こちら工藤探偵事務所……。事件の解決依頼ですか？はい、すぐいきます。」

ここは、工藤家。今は蘭が買い物に行っているので家に新一しかいなかった。蘭にメールをしてから出掛けて行った。

「今日の夕飯は何がいいかな〜。」

蘭は、商店街で夕飯の買い物をしていた。

ブーブー

すると、突然携帯が震え出した。一体だれからだろうかと蘭が携帯を見ると、案の定メールをしてきたのは新一だった。

「なにになに……。『悪い蘭！急に事件解決の依頼の電話がかかってきちまってよ。今日のうちには帰れそうにねーからよろしくな！』か。……。まあ、事件の依頼じゃしょうがないよね。新一のお仕事だし。」

蘭は、パタンと携帯を閉じると買い物を終えて家にかえっていった……。

「新一、まだ帰れないのかな……………」

新一が事件に行った次の日の昼。蘭は一人で家にいた。

ブーブー

突然携帯が鳴る。新一からかと蘭が携帯を取ると新一からではなく園子からのメールであった。

「園子からだ。どうしたんだろう……………」
『蘭！大変よ！新一君が綺麗な女の人と歩いてた！』
「って……………」
「えっ、まさか新一が……………」
「浮気？」

綺麗な女の人と歩いていた。浮気。蘭の頭の中ではそんなことがよぎっていた。

「でも、まだ分からないわよ！自分で見て確かめないと！」

蘭は、そう決意すると園子が言っていた新一を目撃したところへいつてみることにした。

「ここかな……………」
園子がいつてたのって。」

蘭は、走って5分で目的地についた。

「新一は……………」
「あっ！」

蘭が見た新一は……………」
園子の言う通り綺麗な女の人と一緒に腕を組んで歩いていたのだ。新一は、恥ずかしそうにしている。蘭はこらえきれず新一のもとへ駆け寄った。

「らっ蘭！どうしてここに……………」

新一は、驚いている様子である。女の人の方かというとただ蘭をじっと見つめているだけだった。

「いいわよ！私なんてどうせ、どうせ……………」

蘭は、泣きながら走り去ろうとする。

パシッ

新一が蘭の腕を掴む。そして、そのまま蘭を抱き寄せた。

「蘭。これは誤解だ。それに、俺が1番好きなのはおまえだけだから……………」

「新一……………。じゃあ、この人は誰？」

冷静になった蘭がいう。すると新一は一度蘭を抱くのを止め女の人
のほうを向いた。

「この人は、事件解決の依頼者で杉崎 賢也さんだ。」

「賢也さん……………。あれっでもこの人女の人なんじゃ……………」
すると、賢也が恥ずかしそうに話しはじめた。

「いいえ。私は男です。まあ、いわゆる女装家ですね。よく、間違
われてこまるんですけどね……………」

「へえ……………。でも、すごく綺麗でびっくりしました！」

「ありがとうございます。勘違いさせて。」

「いいんです。気にしないでください。」

「では、僕は帰ります。」

「はい。ありがとうございました。」

「さようなら！」

こうして、新一の浮気疑惑は無事に晴れ仲良く肩を並べて帰る二人
であった……………。

新一、浮気疑惑！？（後書き）

どうも、ラッキーラインです。実は、今までやっていた連載が二つ
終わり、連載はこれだけになりましたのであるべく早く最新できる
ようにがんばりたいです。

新婚夫婦の北海道旅行（前書き）

新蘭で前回の続き。新婚旅行の話です。

新婚夫婦の北海道旅行

「ねえ、新一。私達そういえば結婚してから新婚旅行にいったないよね。」

ある日の昼。たまたま新一が家にいるため蘭は新一に思い切つて聞いてみた。

「そういえばそうだな……。でも、なんで行つてなかったんだ？」

「それは！新一が事件ばかり行つて長い休みがなかったからでしょ！」

「うつ。」

痛いところをつかれた新一はうめき声をあげる。

「わるかったよ。……で、どこ行く？」

「うーん……。北海道とかいいんじゃない？」

「そうだな。じゃあ、北海道にするか。」

こうして、新婚旅行の行き先は北海道になった……………。

旅行当日。二人は朝早くに仕度をし、飛行機に乗った。

「着いた〜！」

無事、飛行機で事件を呼ぶことなく二人は北海道についた。

「でも、新一がまた飛行機で事件を呼ばなくてよかった。せめて、新婚旅行は楽しみたいもんね！」

「まあ、俺が呼んでんじゃなくて事件が呼んでんだけどな。」

「じゃあ、行こっか！」

「おう！」

さて、新一と蘭は無事新婚旅行を終えることができるのか……………

……………？

空港をでた二人は、時計台などの名所を巡り最後に泊まる予定のホテルの近くにある湖に来ていた。

「わぁー。広いね！」

「確か、まりもが有名ならしいぜ。」

「へえー！」

新一と蘭がなごやかに話していると……………

「きゃあああああああ……！！！！！！！！！！」

近くから悲鳴があがった。蘭がまさか……………と思い、新一と悲鳴のあがったほうへ行くと案の定、人がたおれていた。

「……………まったく。やっぱり事件を呼ぶんだから。」

「ごめんな。」

「いいの、いいの！ほら、はやく事件解決してきちゃって！」

「ほんつとわりい！」

そういつて新一は事件解決に向かった。

夕方5時。新一は無事事件を解決し、二人はホテルへ向かった。

「なあ、蘭。ほんとわるかった！せつかくの新婚旅行だったのに事件解決にいつちまって……………」

新一が申し訳なさそうに言った。蘭はニツコリと新一のほうを向いて「いいの。新一が事件を解決して帰ってきたときの顔、好きだし。」

「と
いった。」

「ありがとう……………」

新一も蘭につられてニツコリと笑う。二人はしばらくこうして笑いあっていたのだった……………。

結局、事件が起きてしまったが蘭はこれこれですごくいい思い出になったなと思うのであった……………。

firstkiss(前書き)

新蘭で高校三年生のころの話。二人は付き合ってまだまもないです。

f i r s t k i s s

これは、まだ新一と蘭が高校三年生のころのお話………

「ねえ、蘭！」

今日は、金曜日。学校の昼休みが始まったところだ。いつものごとく、新一は事件でいないため園子と二人で蘭はお弁当を食べていた。
「なに、園子。」

「蘭って、今新一君と付き合ってるけど恋人らしいことはあまりしてなさそうよね………」

「え？恋人らしいことって………」

「キスとか。」

「そつ園子！いきなりなんなの！？………確かにまだしてないけど………」

「やっぱり………」

園子が急に声のトーンを下げたので蘭は不思議そうな顔をする。

「だって、恋人でしょ！やっぱキスはしないと！」

「そんなこと言っても私と新一って幼なじみだから………」

「もう！いい？蘭と新一君はもうだだの幼なじみじゃなくて恋人よ！キスがないってことは世間的に言うとか冷めてるっていうことなのっ！」

「冷めてるって………園子、オーバーだよ。」

「キスしてくれないのは大問題よ！はやくそういうのはすませない

と他の女の子に取られちゃうわよ！いいの？」

園子が蘭の顔をのぞきこむ。蘭は「これによこによとちいさいこえで」「それは、ちょっと……………」。

と言った。その返事に園子は満足げな顔をするといきなりこんなことを言った。

「よし！じゃあ、新一君がしてくれないなら自分でしちゃいなよ！」と……………。

放課後。部活が終わった蘭は、一人で帰ろうとしていた。

（はあ……………。園子はああ言ってたけど、うまくいくかな……………。第一、今日新一いないし……………。）

そんなことを思いながら校門を出るとそこにはなんと……………。

「おつかれ、蘭。」

新一がたっていた。

「新一！事件は？」

「ああ。事件なら解決したぜ。さ、帰ろ、な！」

「うん！」

蘭はとびつきりの笑顔で新一と帰り道を歩き出した。

「新一！見て！夕日が綺麗！」

いつのまにか空は紅く夕日で染まっていた。

「ああ、綺麗だな……………」。

蘭は、夕日を見て決心した。園子に言われた作戦をする……………。

「新一。一回目をつぶって。」

「あ？ああ、分かった。」

新一は顔に？を浮かべながら目をつぶった。そして次の瞬間……

…。

バサバサバサ……

鳥が夕日に向かって飛ぶと同時に初めてのキスをした……………

……。

「らっ 蘭……………」

「ごめん！嫌だった？」

「いや、うれしいよ 蘭！ありがとう！」

そういつて新一は 蘭をやさしく抱きしめる。

「新一、顔あかいよ。」

「バツバーロー！夕日のせいだよ！それに 蘭こそあかいじゃねえか

！」

「私も夕日のせいよ！」

そういつたあとほえむ二人。

真っ赤に燃え上がる空が二人の first kiss を祝福していた

……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4365w/>

絵羽模様

2011年11月17日19時59分発行